

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！ — 第二回 (98年度) 春期ドイツ語インテンシブコース報告 —

大塚 讓 編訳
鈴木 将史
ハイケ・パーペンティン
藤本 純子
アンネドレー・ヘーネル
ウーテ・ペルツ-オーウェンス
(50音順)

目次 (カッコ内は執筆者)

0. はじめに
1. 主旨と概況 (大塚 讓)
2. 段階IIのプロジェクト (大塚 讓)
3. 部屋探し/ドイツの男女 (鈴木将史)
4. カーニバルと復活祭/ドイツのコマーシャル (ハイケ・パーペンティン)
5. ドイツの若者たち/動物ことわざ (藤本純子)
6. ザクセンの新1年生 (アンネドレー・ヘーネル)
7. 出合いのゲーム/たくさん知っているのは誰?/ドイツ-オーストリア-スイスゲーム+ドイツ語圏のポスター作成 (プロジェクト) (ウーテ・ペルツ-オーウェンス)

0. はじめに

以下は「第二回春期ドイツ語インテンシブコース」の報告である。記録を残すことがコースの改善に結びつくと考えるからである。記録があれば誤りの繰り返しを避け成功したプログラムをさらに発展させることができる。

尚、ハイケ・パーペンティン、アンネドレー・ヘーネル、ウーテ・ペルツ-オーウェンスの報告は、ドイツ語で執筆されたものを大塚が訳出したものである。

1. 主旨と概況

(大塚 讓)

私たちが第二回目のインテンシブコースを実施した理由は、第一回目と全く同じである。今の教育体制では落ちこぼれてしまう学習者の「意欲」と教師の「意欲」を救済するためである。現在の巨大なクラスサイズの下で意欲ある学習者のせつかくのモチベーションが先細りになって行くのは見るに忍びないものがある。私たちは、意欲ある学習者に満足の行く練習の場を与え存分にアクティブになりうる機会を用意したいと思う。教師の側から見ても、現在の諸条件の下では、課題の消化のみに追われて、学習事項を活性化させるために多様で楽しい応用練習の機会を与えることはきわめて困難である。この意味で私たちのインテンシブコースは、意欲ある学習者とそれに応えようとする教師によって営まれるものであり、「学ぶこと」そのものへの喜びを分かち合

大塚 謙, 鈴木将史, ハイケ・パーベンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ベルツ-オーウェンス
う場, 学生も教師も共に心から楽しめるコースとすることを目指している。また参加者たちにあつては, 協調性を要する共同作業を通して新しい出会いの場を持ってほしいと願っている。

第二回インテンシブコースは, 1998年3月30日から4月3日にかけての5日間に実施された。時間配分は各クラス毎日2時間240分とし, 午前に1時間(120分), 昼食後1時間(120分)とした。5日間で1,200分となり, これを通常クラスの授業時間数に換算すると90分授業を週3回行うクラスの約1カ月分以上, 90分授業を週2回行うクラスの約1カ月半分以上となる。総合テーマは「ドイツ語圏の街角から」とし, 講師が能力レベルに配慮しながら現代のドイツ語圏の様々な側面を思い思いに紹介できるようにした。^{#1} 段階Ⅰ(1年終了程度)は毎時間一回, ないしは二回で完結する授業に参加し, 段階Ⅱ(2年終了程度)は午前に1~2回完結型の授業に参加し, 午後は毎時間「プロジェクト」を行った。「プロジェクト」の内容は, 日本の生活文化に関心のあるドイツ語圏の人々を想定して, 日本の異なった生活習慣を分かりやすく紹介する Japanknigge(日本式生活法指南)なるものの作成であった(詳細は「2. 段階Ⅱのプロジェクト」を参照されたい)。

参加者数は第一回より少なく, 段階Ⅰが14名, 段階Ⅱは5名の参加があった。男女の内訳は圧倒的に女性が多く, 段階Ⅰでは男性は1名のみ, 段階Ⅱでは全員が女性であった。

プログラムの内容^{#2}について言えば, 最初の時間に参加者全員がなるべく早く打ち解けるように段階ⅠとⅡが共に参加する「出会いのゲーム」を置いたのは去年と同様であった。講師側も1名を除いて全員がこれに参加した。また1時間を30分長くして120分とし, 個々のプログラムを自己完結型にしたことに伴って, 実にバラエティーに富んだものになった。事前の打ち合わせでテーマや学習方法の重複を避けるよう配慮してはあったが, 結果的にテーマの内容, 言語能力への重点の置き方, 使用教材の種類の内いずれを取ってもバランスの取れたものとなった(詳細は個々の説明を参照されたい)。

しかし多人数の講師が協力して行うインテンシブコースは, 内容面, 技能面, 教材面がバラエティーに富んだものとなるという大きなメリットがある反面, 参加者の習得のプロセスを追跡できないという弱点がある。これがゲーティンストゥートなどの専門的な言語教育機関の行うインテンシブコースとの一番大きな相違と言えるかもしれない。その点を補うものとして少なくとも段階Ⅱには「プロジェクト」が配置されている。コースでの習得事項が「プロジェクト」に直接・間接に流入し定着することを多少とも意図しているつもりである。しかし段階Ⅰの場合にはまだ全般的な基礎力が形成されていないため大がかりなプロジェクトを行うのは荷が重すぎるように思われる。

2. 段階Ⅱのプロジェクト^{#3} [3月30日~4月3日]

(大塚 謙)

主旨

インドネシアのドイツ語教師たちがドイツの生活習慣を紹介する教材兼旅行案内を作成した, というドイツ語教育雑誌の記事*にヒントを得て, ドイツ語圏の日本に関心のある人々を念頭に置いて, “Japanknigge”(日本式生活法指南)なるものを作らせてみてはどうか, ということになった。そうすれば日本の学生たちも, 自分たちが熟知していることに基づいて作業を進めることができるし, ネイティブたちとの作業を通じてドイツ語圏の生活習慣とも比較対象することができ,

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

新しい知識を獲得することもできる。またドイツ語圏に旅行したり滞在したりするときにコンパクトに日本のことを紹介する手掛かりにもなる（場合によっては売ることだってできるかも知れない。最後の部分はこういうノリで行こうという洒落に等しいが）。

Fertigkeit (外国語能力) という点では、参加者は簡単な文をたくさん書くことになり、書く能力を磨くよいチャンスになるだろう。また参加者は二重の意味でプレゼンテーションについて学ぶことになるだろう。まず収集しドイツ語に変換した情報を大判の模造紙に分かりやすく提示する作業を通して、次に他の参加者に対していくつかの小さな寸劇を演じることで主な情報を紹介する試みを通して。

* „Deutschlandknigge für Indonesier“ aus: Fremdsprache Deutsch 6 1997 s. 20-22

経過

- 1) 導入：主旨と作業手順の説明
- 2) 日独の生活文化で特に際だった相違を見せる事項を出来るだけたくさん探し出し、次にそれらのキーワードをどんだんドイツ語のキーワードに移して行く。
- 3) 収集されたキーワードから特に興味深いものを選定し、その内容を簡単なドイツ語文に定着させて行く。でき上がった文章を項目毎に整理する。
- 4) レイアウトを考えて（内容を視覚化する写真も使用）大判の模造紙に最終的なプレゼンテーション。併せて配布用に B4 版の縮小版（印刷業者の協力を得てオリジナルをそのまま縮小）も作成する。
- 5) 他の参加者へのプレゼンテーション（小さな寸劇をたくさん演じることによる内容紹介）

※参加者はこのプロジェクトに強い関心を示し、終始楽しそうに作業に打ち込んだ。ほぼ毎回時間延長したほどだった。特に 4) などは夜遅くまでの作業となった。

毎回の成果は大塚がその日の内に整理してヘーネル氏にファックスし（これは、毎回の時間延長のためネイティブスピーカーが作業に最後まで立ち会えなかったためである。）、修正されたものをその都度活字にして、それをもとに参加者たちが翌日の作業を進めるという、やり方を取った。

成果

出来映えはなかなかのものであった。参加者の中で後にドイツ滞在中は、語学コースやホームスティ先などで日本のことを紹介する祭、具体的なきっかけとして重宝したそうである。因みに、日本の異なった生活習慣として紹介した事項は、入浴の習慣、玄関、寝床、トイレ、ゴミ収集、タクシー、列車に乗る際の検札方法、学校給食等であった。

また他の参加者への寸劇によるプレゼンテーションが今回のインテンシブコース全体を締めくくるプログラムとなったが、パーペンティン氏の指導と参加者たちの機知に富んだ思いつきがうまく噛み合っただけで実に愉快的な内容紹介となり、会場を大いに沸かせたものである。

今回のプロジェクトの成功にはいくつかの原因が考えられる。第一にテーマが参加者に身近かつ具体的で、終始発見の喜び（日独の生活文化の相違についての）を感じながら作業に取り組むことができたように見受けられる。ネイティブの講師たちも改めて日独の生活上の小さな違いを確認しそれを共に楽しんだようである。第二に言語能力上の力点が「書くこと」にあったことである。同じ自己表現練習でも、話す練習には即座に反応したり人前で演じたりすることを伴

大塚 謙, 鈴木将史, ハイケ・パーペンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ベルツ-オーウェンス

い、多くの日本人学習者はそれに大きなプレッシャーを感じがちのようだが、書く作業ではそうしたプレッシャーを感じることなく、むしろ彼らの言語構造への豊富な知識が生かされてより以上の成果が期待できるのである。第三にあらかじめ十分な時間を確保したことである。毎日午後2時間づつを5日間もやると時間を持って余すかとも懸念されたが、それは杞憂に終わり、もう少し時間があってもよいくらいであった。第四にプロジェクトの参加者を2年終了者に限定したことである。ある程度の内容の比較的大がかりなプロジェクトを実行するには、基礎的な言語能力を習得していなければ無理なのであろう。まして1年終了者と2年終了者が混在したのでは両方にストレスがたまるばかりで然るべき成果は挙げにくい、ということだろう。この意味で一昨年のスケッチプロジェクト（やや長い寸劇を演じることを狙った）は、言語能力上の力点が異なることを差し引いて考えても、両者の協力を前提にしていた点に基本的な無理があったと言わざるを得ないだろう。第五に全参加者への小さな寸劇による内容紹介について言えば、これが機知溢れる愉快なものになったのは、プロジェクト参加者が4日間このテーマについて考え尽くしそのドイツ語表現にも精通し切っていたために、寸劇を作るに当たってもそれを簡単な日常表現に移し替えるのにさして苦勞しなかったのであろう。

今回の経験は今後のプロジェクト実施に対して貴重な教訓を与えてくれたように思われる。第一にテーマが参加者全員に身近かでありながら知的想像力を刺激するものであるべきこと、第二にテーマが容易に日独、ないしは日欧の社会・文化比較に結びつくものであるべきこと、第三に「書く」作業に力点を置いたものが日本人学習者には取り組みやすいこと、従って「演じる」ことを主要な目標とするものを安易に企画すべきではないこと（そのためには日本人学習者と「話す」こととの関係を良く考慮した何か特別な工夫が必要であらう）である。

3. 部屋探し(I)/ドイツの男女(II) [4月2日]

(鈴木将史)

鈴木担当分の時間では、主に平易なドイツ語の速読能力と基本的な独作文能力の涵養を語学的な目標とした。

一年生向け:

テマ: 住居探し

テキスト: Deutsche Welle “Auf Deutsch Gesagt” 1からの抜粋テキスト(住居探しがテーマ)と、小林俊明著『はじめての独作文』

内容: 速読テキストをまずテープで聞き、音声面から内容を大まかに把握してから速読にかかった。読了後、内容についての簡単な質問を教師との間でやりとりし、ドイツにおける部屋探しの特徴とその印象を学生間で話し合った。

後半の独作文の時間では、日本語をそのまま独訳した経験が学生には稀薄であったため、特に動詞、冠詞、前置詞の用法に注意して基礎的な独作文を練習した。

二年生向け:

テマ: ドイツの男女

テキスト: ドイツのテレビ雑誌“Fernsehwoche”からの抜粋テキスト(男女の恋愛がテーマ)と、中島耕太郎著『レベルアップ独作文』

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

内 容：速読テキストは、内容の梗概及びグロッサールをあらかじめ与えておき、時間内（約1時間）に出来るだけ分量を読むべく努力した。その後若い男女の心理が日独においてどう異なり、またどう類似しているのかを学生間で議論した。

- 後半の独作文の時間では、応用的な作文をもとに、spielen と machen や kennen と wissen や定冠詞と不定冠詞の用法の違いなどについてチェックした。

4. カーニバルと復活祭(1)(2)(I) / ドイツのコマーシャル(II) [4月1日 / 4月3日]

(ハイケ・パーペンティン)

1. ドイツのコマーシャル

このテーマを選ぶきっかけとなったのは、1994年に札幌で行われたゲーティンステイトゥートによるドイツ語教師再教育ゼミナールであった。そこではドイツ語授業のためのビデオ教材が紹介され、またそれについて議論された。日本ではドイツのテレビコマーシャルを見るのは不可能であり、ドイツの雑誌はあまり広く知られておらず、また伝統的な教科書中心の授業では通常そのようなテーマを扱う余地がほとんど無いのわけだから、学習者たちがこのテーマに対して興味、もしくは好奇心さえ示すものと前提して構わないだろう。

1.1. 話すきっかけとしてのスポットコマーシャル

Die Krönung der schönsten Stunden なるビデオには、「外国語としてのドイツ語」授業で使える話すきっかけとして30の様々なスポットコマーシャルが収められているが、私はその内の言語的にも文化的にも比較的分かりやすいものから、デザート用ヨーグルトのスポットコマーシャルを選んだ。

私はオフィスで食べている男たちを示す最初のシーンをまず音声無しで流し、次にこのシチュエーションを学生たちに口頭で説明させ、何が食べられているか、またシーンがどのように展開するか推測させた。第二段階において私はこのスポットを再び音声無しで見せ、例えばなぜ男の一人がさっき食べたのにまたオフィスの床を破って侵入したのか、またそれはこの商品とどのような関係があるのか、といった質問をした。それからようやく私は音声付きでスポット全部を見せた。

1.2. 分析

残念ながら私は学生たちを実際に十分に話すことに導くことに成功しなかった。二つの原因が推測された：a) 日本の学生たちは一般に学校教育において自分から自由に話しコメントするよう教師たちに励まされるということがほとんど無い、それで明らかに彼らは自分が個人的に考えたり想像することを自発的に話す勇気があまり無い（そしてそれが外国語でということになるとますます意気阻喪する）。b) この商品そのものが日本ではあまりに無名であり、そのため学生たちは期待したほどすぐには何のコマーシャルかに思い至らなかった。

このビデオの使用説明書が勧めようとするところとは違って、少なくともこの日本で本当に話すきっかけとするためにドイツのスポットコマーシャルを授業に導入しようと思うなら、やはりもっと別の準備を必要とするように思われる。私は例えば、このスポットをグループワークとして消化し、その結果を全体学習で発表させる、というやり方を提案しておく。そうすれば話すことにとっても気遅れを感じる学生たちでも、なんならまず自分の母語で妥当する答えを推測してみるといった機会が持てるだろう。それに続く発表がドイツ語でなされるのはもちろんだが。その上この練習形態は、様々なグループの成果を横並びにして比較する良い機会を提供してくれる。

私はこの授業でさらに「新聞広告」の問題を扱うことになっていたが、今度はパートナー練習の形でゲームを使って行うことにした。そのため私は以下に見るように教材も練習形態も変更したのである。

1.3. 新聞広告

上で言及した教授法上の意図以外に、私はこのテーマでもって次のようなもう一つの文法的かつ意味論的な意図を追求した：学生たちは広告にしばしば現れる形容詞と副詞の意味と用法を「分類ゲーム」を使って学ぶべきである。

私はこのために全く種々雑多な商品を宣伝する合計13ページのカラーの全面広告を雑誌から切り取っておき、各ページ毎に一個の形容詞か副詞を太いペンで消して読めないようにしておいた。これらのページは番号を付した上、学生が間近で見ることができるよう教室のボード、壁、窓に掛けた。学生たちはペアを作り、ペア毎に形容詞と副詞の記載されたリストを受け取った。私は知らない語の意味(例えば *exklusiv*=排他的な, *ehrlich*=誠実な)をクラス全員に説明した。次に全ての広告ページをよく見てリスト上のどの語がそこで欠落しているかをグループ毎に判定させた。この課題は20分以内で全てのペアによって消化された。その結果はクラス全体で話し合われたが、今度は案の定打ち解けた議論が行われた。学生たちがビデオという教材よりもテキストという教材についてより多くの経験を持っている、ということは私の目にも明らかだった。このゲームを用いる契機となったのは、英語文献“*Alternatives: Games, exercises and conversations for the language classroom*” (R. & M. Baudains) であった。

2. カーニバルと復活祭

多分日本のドイツ語教師の誰しものがクリスマス前の授業の機会をうまく活用しているだろうし、ひょっとすると授業でクリスマスソングを扱ったり、クリスマスや新年の挨拶の決まり文句を教えたりもするであろうが、キリスト教の教会歴で二番目に重要なお祭りである復活祭は、日本ではいつも春期休暇とかち合っているいわば“犠牲”に供されてしまう。カーニバルというテーマもめったに扱われることがないのは、それが通常学年末試験とかち合うからである。毎年春休みに、つまりカーニバルの後、復活祭の直前に行われるこのインテンシブコースは、打って付けの時期に、たいていの学生はよく知らないこれら二つのテーマを、2コマ(1コマ120分)続きの完結したプロジェクトの形で取り上げ、多様な教材を用いて扱う貴重な機会を提供してくれた。テキストを理解するには、すでにある程度初級の域を脱したドイツ語能力を前提とせざるを得なかったので、この授業は2年生向きの授業として計画された。

2.1. テーマ“カーニバル”：教材と教授法上の目標

まず初回の授業で教材として使用されたのは次のものである(《 》カッコ内に示されているのはその都度の教授法上の目標である)：

- 1) ドイツのカレンダー。これに基づいて学生たちにドイツの祝日とそのおおよその1年の内の分布状況を発見させた。

《テーマへの接近》

- 2) ファッシング(=カーニバル。南ドイツとオーストリアで使用される語)とカーニバルに関する解説テキストとそれに対応する語彙解説とそのテキストに関する質問から成る教材

《カーニバルの歴史的な意味と現代的意味の学習》

- 3) 「仮装」というテーマを扱った詩。これをより良く理解させるためにドイツとオーストリアの

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

雑誌に載っていたカーニバルのコスチュームを示す写真や絵を学生たちに見せ、さらにこの作業の後、日本における仮装の風習について尋ねた。

《二つの新しい教材 — 文学と絵画 — を通してカーニバルの一つの側面、特に文化相互の比較のきっかけとなる側面につぶさに触れる》

4) 教科書 „Alles Gute“ の中のケルンにおけるカーニバルを扱ったビデオのシーンの内容について意見交換。その際私自身が簡略化した質問と語彙解説リストを記載したもう一つの教材も活用。

《聴解》

2.2. テーマ「復活祭」：教材と教授法上の目標

テーマ「復活祭」は以下のように扱われた：

1) ドイツで復活祭に際して伝統的に使われる装飾品(中身を取り除かれ彩色された卵、ウサギ、ヒヨコ、復活祭に使われる皿、イースターのカゴ)、工作用の素材(絵の具、復活祭用の生卵)、チョコレートの卵についての観察と説明

《本物を用いた動機付けと語彙の導入》

2) 短い解説書の読解

《復活祭の歴史的背景に関する理解》

3) 短く簡単な復活祭を扱った子供の詩の読解

《ドイツの子供たちにとっておそらくは最も重要なお祭りのイベント、つまり復活祭の卵探しについての文学を通じた理解の深化》

4) 「ドイツにおける復活祭の伝統」というテキストを穴空きテキスト化したものの穴埋め

《内容、語彙、文法構造の明確化》

1回目の授業とこの2回目の授業をまとめるために、授業は「カーニバルと復活祭」ビンゴで締めくくられた。ゲームの実施に当たって、学生たちは新しく学んだ語彙のリストから任意に選んだ9語を升目には書き入れた。ビンゴゲームのご褒美として、もちろんドイツのチョコレートの卵が与えられた。

3. 結び

以上の授業の計画と実施は成功を収め、また学生の間に一きっとテーマの珍しさと教材と授業方法における多様性がその原因であろうが一思いの外ポジティブな意味において大きな関心をもって迎えられたものだが、私はその意味で全ての同僚にこの授業を試してみるようお勧めしたいと思っている。

5. ドイツの若者たち(I)/動物ことわざ(II) [3月31日]

(藤本純子)

クラス I

テーマ：「ドイツの若者たち」

人物やその外見・印象を描写し、自分の好みについて述べる

教材：ドイツの女性雑誌 „Brigitte“ 掲載のドイツの若者たちのインタビュー記事を教材として加工して使用。

大塚 譲, 鈴木将史, ハイケ・パーベンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ペルツ-オーウェンス

(20名の若者たちの写真, それぞれのインタビューのテキスト)

授業内容:

1) 語彙と文法

a) 衣類・身につけるもの・身体部位を表わす名詞, 印象・性格・外観などを表わす形容詞を集める。

b) クイズでa)の語彙の運用練習(受講者が互いに描写し人物を当てる)

2) ペアを組み, ドイツの若者たちの写真を見て好感(反感)・興味を抱く男性・女性を一名ずつ選び, 選んだ理由やその人物に対しての自分の印象や好みをドイツ語で表現する。

3) 各人物が実際にはどういう状況に置かれているのか, インタビュー記事の読解に挑戦し, トピックを他の受講者に紹介する。

成果: 学習者たちは, 自分たちと同年代のドイツの若者たちの姿に親近感を覚えてくれたようだ。

日頃授業で触れるドイツ語とは異なり, 現実の若者たちの声を再録した記事は必ずしも平易な整ったドイツ語ばかりではなかったが, その分, 今を生きているドイツの若者たちの生の姿を反映したものであると言える。彼らを身近に感じ, またドイツといっても, 実際にはさまざまな若者たちがそれぞれの希望や問題を抱えて生きているという多様な現実の一端に触れてもらえたのではないかと思う。

クラスII

テーマ: 「動物ことわざ」

教材: 動物の絵カード, 諺を教材化した紙片およびワークシート, ゲームカードなど

授業内容:

1) 動物に関する語彙の整理, 好みの動物について述べる。

2) a) 諺を字義通りに描写した絵(視覚イメージ)と対応する諺(テキスト)を組み合わせる。

b) 諺の表わす意味内容を推測し, a)に適合する解説文を探す。

3) 諺の本来の意味を知り, 実際の場面にあてはめる/場面を演じてみる。

4) 神経衰弱ゲームで諺を復習

5) ドイツ語の諺に内容的に対応・類似する日本語の諺をあげ, 比較を試みる。

6) 動物の登場するドイツ語の単語や言いまわしを探してみる。

成果: きわめて小人数のクラスであったので, 活発な議論を展開するのは難しかったが内容にじっくりと丁寧にとりくむことが可能だった。

この授業が, 諺の含む背景に思いを巡らせ, また諺以外にもいかに動物を用いた表現が日常的に数多く用いられているかなどにも関心を広げる契機となり, 日本語とドイツ語のイメージの違い・共通点の比較など, 学習者が自らさらなる遊び心を持ってドイツ語に慣れ親しんでいってもらえればと願う。

6. ザクセンの新1年生(I) [3月31日]

(アンネドレー・ヘーネル)

一度自分の大学の外で(私の場合には北海道大学の外で)授業をしてみるのは重要な経験である

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

かもしれない。それゆえ小樽商科大学のドイツ語インテンシブコースで1日の授業を担当できたのは喜ばしいことだった。

このインテンシブコース全体のテーマを知った後、次のような問いが私に浮かんだ：

— 授業内容の重点をどこに置くべきか？

— 学生の予習や復習を前提にできない授業でどのような目標を追求するのか？

— 授業においてどのような言語能力（読解力、書く能力、話す能力、聴解力）とどのような練習形態（一斉授業、パートナー練習、ペア練習）を前面に出すべきか？

私は「ザクセンの新1年生」というテーマを選んだが、それは参加学生の経験世界と結びついていて、同時に日本とは異なるランデスクンデ⁴的なテーマを伝えたかったからである。私は、授業の重点をランデスクンデ的な情報の伝達と学生自身の経験に関するフリートーキングに据えた。

その際私は一つの難問を抱えていた。つまり私は学生達を直接知らないし、また彼らの正確な言語レベルも知らなかったので、私は授業で必要とする語彙をその時間内で手に入れなければならない、というところから出発せざるをえなかったのである。

私の授業は次のような経過を辿った：

- 1) 最初の小さな対話（パートナー練習）の中で、学生達は彼らがすでに知っているドイツ諸州と諸都市を空白のドイツの地図に記入した。
- 2) 私は小さなリスニングテキストを用いて
 - a) ザクセン州の文化（例えばヨハン・セバスティアン・バッハ）
 - b) 子供の簡単な語彙で自分とザクセン州を紹介するこの授業の主人公・リーザへと学生たちを導いた。
- 3) 次に学生達は彼らの地図上にザクセン州とその二つの都市、ライプツィヒとドレーズデンを書き入れた。
- 4) 大意を聞き取り練習（誰が話しているか？ またこの人物について私たちはどのような情報を知っているか？）の後、学生達は2度目の聞き取りの際、リーザがどのようなお祝いの準備をしているのかに注意を払った。
- 5) 続いて学生達は、リーザについての写真物語（彼女の学校の始まりをドキュメントしたもの）を与えられた。これらの写真を手掛かりに語彙が理解され、さらにホワイトボードで確認された。
- 6) 最後に学生達は分割された読解テキストを受け取り、それらを写真と結びつける作業に取り組んだ。
- 7) もう一度質問のチャンスが与えられた後、授業を締めくくるフリートーキングにおいて学生たちは自分が特に気に入っている祝祭について報告した。

授業の成果に関して：

引き続いての授業を予定できなかったのも、とりわけ語彙の定着を図ったり、また多くの文法や語彙についての規則の確実な習得を図るには至らなかった。しかし現に動機ある学生達が授業に参加しており、話すことを喜んでいたのであるから、ニーズ（欲求）があること、またチャン

大塚 謙, 鈴木将史, ハイケ・パーペンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ペルツ-オーウェンス

スさえあれば通常の授業以外でもドイツ語に取り組み、ランゲスクンデ的な知識を拡大する用意のある学生がいることは明らかであった。

7. 出会いのゲーム(I・II)/たくさん知っているのは誰?(II)/ドイツ-オーストリア-スイスゲーム+ドイツ語圏のポスター作成(プロジェクト)(I)

[3月30日/4月2日]

(ウーテ・ペルツ-オーエンス)

今年も私たち——ドイツ語好きの学生たちと教師たち——は再び学期の始まる少し前に集まって、共にドイツ語インテンシブコースで喜びを分かち合った。昨年同様、たくさんネイティブスピーカーも加わって、ドイツ・オーストリア・スイスについての素晴らしいゲームや興味深い事柄がたくさん取り上げられた。私たち教師にとって、また学生たちにとっても、何より重要なのは、私たちがもっと良く知り合うこと、そして楽しむことであった。

おしゃべり禁止!

出会いのゲームの段階では、今回も1年生と2年生の合同とした。この二つの学年グループと教師たちは、ペアに分けられてから一通の封書を渡されたが、それには自分のパートナーについて(家族、年齢、職業、子供、住所、趣味などを)書かなければならなかった。しかしこの課題の手強さはドイツ語にはなかった、全く逆に話すことが御法度という点にあった。パントマイムを使うことだけが許された。2・3の学生たちはどんなにかほんの少しでもドイツ語を話してみたかったのか! 人は言葉無しで手や足だけでもどんなに多くのことを表現できるものかを目の当たりにするのは素晴らしいことだった。

作り話と吸血鬼

私の1時間目(1年生対象)は本当に気味の悪いものだった。と言っても、私たちのドイツ語がとてもひどかったからではなく、私たちが「不安とドラキュラ」というテーマに取り組んだからだった。私は学生たちから、彼らが一体何に対して不安を抱くかを知ろうとした。全員がこれについてのアンケートを受け取りチェックした。それから学生たちは、彼らがなぜ何かを怖がるかを根拠付けなければならなかったが、このためにすぐに weil-文(理由文)を少し練習することができた。次のような質問を手掛かりに私たちはドイツ語圏の文化と日本の文化の興味深い位相にメスを入れることができた。すなわち:不安は文化特有のものか? ドイツ人または日本人は何が一番怖がるか? もちろん私たちは、吸血鬼ドラキュラについても話すことを避けて通ることはできなかった—ところでこれに対しては私たちのグループの誰一人として怖がらなかった。

私が吸血鬼についてのいくつかの必要な語彙(血、噛みつく癖のある動物(犬、馬など)、棺、等々)を説明した後、私たちは一緒にウド・ユルゲンスの「おー、アールエイチ・マイナス」を聞いたが、そこでは一人の愉快的吸血鬼が登場して自分の素晴らしい吸血鬼人生について物語り、またやはり吸血鬼になりたい一人の男に出会うのである。穴空きテキストを使って私たちはこの歌の内容を確認した。学生たちは正確に聞き取って欠けている(既知の)語を記入しなければならなかった。これはとてもうまく行ったが、それには歌詞の隣のスケッチ(挿し絵)が聞き取りをとても容易にしてくれた。事後の作業として、私たちはドラキュラについてのマルチプルチョ

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

イスの問いに答え、そして自ら吸血鬼として生きたいという申請書類を書いた。(読者諸賢はこの作業の詳しい内容をお知りになりたいのではなからうか？)

誰がより多く知っているか？

午後の1年生のクラスはたいへん盛り上がったが、それは彼らが熱い語彙戦争を展開したからであった。「カテゴリー」というサイコロゲームでは、一つのカテゴリーに対して一番多くの語を書き留めることができたグループのみが勝利を取ることができる。あるチームの書記役は順番に変わる。様々なカテゴリー(人間、様々な活動、家庭内で、町で等々)があり、問いは、何をするのが好きですか？ 誰が家族の一員ですか？ パーティーでするのは何ですか？ といった類の簡単なものであり、また書記役の素早さが決定的な意味を持つが、他方他の質問は幾分もっと難しくもっと熟慮を要する次のような質問もある：甘いものは何ですか？ 聞くことができるものは何ですか？ 健康的なものは何ですか？

これは素晴らしい語彙ゲームで、様々なレベルやニーズに合わせて変えることができる。その際騒々しく激しい成り行きになってもちっとも心配するには及ばない。要するに全員が勝利を取めただけなのである。

ピクニック

絵物語りは常に外国語授業において優れた話すきっかけとなるもので、どのレベルにもマッチする。1年生クラスでは3つのグループに分かれて次のような絵物語りが消化された。まず最初、グループ毎に順不同の一組の絵の内容が一枚一枚語彙リストを使って説明された。それから学生たちは絵を正しい順序に並べ替え、事の次第を現在完了で説明しようと試みた。理解を再確認するために穴空きテキストを使ってペアで物語りを再構成する課題が行われた。学生Aと学生Bのテキストは相互補完的な構成になっており、二人が交互に朗読した。この課題は聞き、書き、読むことが一体となった優れた練習である。

オーストリア・ドイツ・スイス＝クイズ

2年生と最後に共にした時間はドイツ語圏の国々、オーストリア・ドイツ・スイス一色に染め上げられた。多種多様な質問が目白押しの磐上ゲームを使って、学生たちはこれら3国についての知識をテストすることができた。もちろんやはりサイコロ運が重要だった。このテーマの締めくくりとして学生たちは小グループに分かれてこれらの国々の一つに関する宣伝ポスターを作成した。完成したポスターはその後この教室で学ぶ全ての学生たちから称賛されることとなった。

私は来年もまた多くの学生たちがインテンシブコースに参加するものと確信している。ただほんの少し悲しいのは、わたしがもはやその場にいることができないということである。私のかつての学生たち(および将来ドイツ語を学ぶ学生たち)の全てに対して将来の多幸と楽しいドイツ語学習をお祈りしたい。

[注]

1. 2回会議を開き、コースの主旨、テーマ、役割分担、「段階II」のプロジェクト等について話し合い、その後

大塚 謙, 鈴木将史, ハイケ・パーペンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ペルツ-オーウェンス

はファクス・電話・郵送等で連絡を取り合った。下のリストは教師間で授業内容を周知・調整するために用いたものである。テーマ, 授業形態, 重点を置く技能, 使用機器を記入するようになっている。因みにこのリストは, ドイツ語ドイツ文化ゼミナール (通称「インターユニ」) で用いられているものを一部変更して使わせていただいている。

U n t e r r i c h t s p l a n
(Bitte tragen Sie auf der Liste ein.)

S t u f e	Themenbereich Medien/Materialien	Unterrichtsformen PA=Partnerarbeit GA=Gruppenarbeit PL=Plenum R=Rollenspiele EA=Einzelarbeit	Ziele/Schwerpunkte LV=Leseverständnis HV=Hörverständnis SP=Sprechen SR=Schreiben D=Diskussion W=Wortschatz GR=Grammatik LK=Landeskund/Wissen/ Kenntnisse	Geräte
I	教師名と日付		LV= HV= SP= SR= D= W= GR= LK=	
	Thema: Materialien:	PA GA PL R EA		
II	Thema: Materialien:	PA GA PL R EA	LV= HV= SP= SR= D= W= GR= LK=	

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

2. 今回のコースのアウトラインをお示しする意味で、参加決定者に送付した資料とプログラムを再録しておく。

インテンシブコースに参加する皆さんへ

春休みをいかがお過ごしですか？

さて、第2回ドイツ語インテンシブコースのプログラムをお送りします。皆さんがますますドイツ語が好きになるよう、スタッフ一同千恵を絞ってプログラムを作成しました。その特色は、現代のドイツ語圏の生きた姿の一端に触れること、たくさん使うことで今まで学んだことを統合しアクティブな力を磨くこと、そしてさまざまなゲーム型の練習を通してこれらの課題の達成を目指すこと、です。

ともかく一緒に力を合せて楽しみましょう。参加者も教師も共に心から楽しむことができれば、今回のコースは大成功と言えるでしょう。

[講師紹介] (姓のアルファベット順)

藤本純子 (北海道大学), Annedore Hanel (北海道大学), 大塚 譲 (小樽商科大学), Heike Papenthin (小樽商科大学・北海道大学), Ute Perz (小樽商科大学), 鈴木将史 (小樽商科大学)

[実務的連絡]

- ① 使用教室：Stufe I は MH (マルチメディアホール) 1, Stufe II は MH2 を使用
- ② 時間割：1 時間目 = 10 時～12 時 / 2 時間目 = 13 時～15 時 / 昼休み 12 時～13 時
- ③ 3 月 30 日の 1 時間目の冒頭に参加者・教師全員で「出会いのゲーム」を行い、お互いに顔見知りになる。場所は MH1。
- ④ 持参するもの：教科書と辞書 (ただし持っていれば) 程度。
- ⑤ 茶菓子代：300 円 (それぞれの教室の所定の箱に入れ名前をチェック)
- ⑥ 4 月 3 日の 2 時間目の後半に Stufe II のプロジェクトの成果が紹介される。これは全員参加。Stufe I の参加者にもためになるはず。
- ⑦ ⑥の後、簡単なアンケートに答えて下さい。皆さんの意見を参考に今後のコースをよくして行きたいので。
- ⑧ Stufe II のプロジェクト (Projekt) について

ドイツ語圏の人が日本の家庭のお風呂に入った、とします。洗い場の意味が分からないまま、湯船で体を洗い始めるかも知れませんね。ドイツ語圏の住まいには玄関というものがありません。わが家に招待したドイツ人の中には、玄関で靴を脱いで靴下のままその場に立って脱いだ靴を手にながら「靴はどこに置いたらいいんですか？」と途方に暮れながら尋ねた人もいますし、玄関と居間の中間の小上がりまで靴のまま上がってきた人もいました。このような生活習慣上の小さな違いは無数にあります。そんな違いを見つけ出して、ネイティブの先生と相談しながら、ドイツ語圏の人々向けの生活ガイドを作れば結構売れるのではないかと。うまく行けばひと儲けできるのではないかと。これがプロジェクトの主な内容です。もちろん大いに儲かっても教師がピンハネすることはありませんから、安心していいものを作ってみましょう (作業内容については下記参照)。

1998 年 3 月 18 日

大塚 譲

[Stufe II (段階II) のプロジェクトの作業内容について]

a) テーマ

日本とドイツ語圏との生活習慣上の相違点を捜し、比較検討の上、日本の生活文化に関心のあるドイツ語圏の人々のために生活ガイドを作成し販売する。(例) 入浴方法の相違

b) 作業スケジュール

- ・相違点の収集 (3 月 30 日)
- ・相違点の選定 / 比較検討 (3 月 31 日)

大塚 謙, 鈴木将史, ハイケ・パーペンティン, 藤本純子, アンネドレー・ヘーネル, ウーテ・ペルツ-オーウェンス

- ・提示様式の検討/作成開始 (4月1日)
- ・完成 (4月2日)
- ・他の参加者への紹介 (4月3日)

※相違点の比較検討や作成(作文)はネイティブ教師と相談しながら進める。これが勉強になるはず。

※大判模造紙に作成して成果を公表し, また B4 縮小版(作成は教師が担当)を販売用とする。

98年春期ドイツ語インテンシブコースプログラム

		1 講目 (10時~12時)		2 講目 (13時~15時)	
3月30日 Mo	I	Perz/Otsuka (30 Minuten) Kennenlernenspiel 出会いのゲーム Teilnehmer+Lehrer 参加者・教師全員 (MH1)	Otsuka 大塚 Verabredungsspiel —Dialogübungen— 約束ゲーム —対話練習—	Perz Wer weiß mehr? —Vokabelspiel— たくさん知っているのは誰? —語彙ゲーム—	
	II		Perz Wovor haben Sie Angst? —ein Lied— 何が恐いの? —歌で練習—	Otsuka Einführung ins Projekt+Projektarbeit プロジェクトの説明・相談+作業開始	
3月31日 Di	I	Hänel Schulanfang in Sachsen ザクセンの新学期		Fujimoto 藤本 Personen und Bekleidung beschreiben 人物と服装を描写する	
	II	Fujimoto Sprichwörter mit Tieren 動物の登場する格言		Hänel Projekt	
4月1日 Mi	I	Otsuka Geschichte erzählen mit Video ビデオを見てお話しを作ろう		Papenthin Karneval und Ostern in Deutschland, Österreich und der Schweiz (1) ドイツ, オーストリア, スイスに見るカーニバルと復活祭(1)	
	II	Papenthin WERBUNG in Deutschland ドイツのコマーシャル		Otsuka Projekt	
4月2日 Do	I	Perz Deutschlands—Österreich—Schweiz—Spiel Projekt: Poster von D, Ö und CH ドイツ—オーストリア—スイス—ゲーム プロジェクト: ドイツ語圏のポスター作成		Suzuki 鈴木 Zimmersuche Schreib—und Sprechübung 部屋探し 書いてみよう・話してみよう	
	II	Suzuki Deutsche Frauen und Männer —Lese—und Schreibübung— ドイツの男女 読んでみよう・書いてみよう		Perz Projekt	
4月3日 Fr	I	Papenthin Karneval und Ostern in Deutschland, Österreich und der Schweiz (1) ドイツ, オーストリア, スイスに見る カーニバルと復活祭(2)		Otsuka Zungenbrecher und Lied 早口言葉と歌	Otsuka/Papenthin Präsentation/Umfrage プロジェクトのプレゼン テーション/アンケート
	II	Otsuka Einblick ins Studentenleben —Geschichte erzählen mit Video— —学生生活を覗(のぞ)く —ビデオを見ながらお話しを作ろう—		Papenthin Projekt	

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに!

3. 次のものがこのプロジェクトの成果である。



Essgewohnheiten

- Fast in jedem Restaurant bekommt der Gast zuerst ein Glas Wasser, und Oshibori (kaltes/heisses Tuch). Man kann damit die Hände abwischen!
 - Wenn man Nudelgerichte wie Soba, Udon und Pomen isst, darf man schmatzen und schlürfen. Dieser Ton gehört zur Kultur des Essens in Japan.
 - Nach dem Essen zahlt man an der Kasse, die am Eingang ist. Man bezahlt in Japan nicht am Platz.
 - Manche Japaner finden es nicht gut, gehend zu essen.
 - Im Geschäft brauchen Sie Gemüse und Obst nicht zu wiegen, weil alle Waren schon einen Preiszettel haben.
- Achtung!**
- Nur wenige Restaurants haben eine englische Speisekarte.
 - Wenn Sie nicht Stäbchen benutzen können, können Sie um eine Gabel und ein Messer bitten.
 - Im Restaurant, Hotel, Taxi usw. brauchen Sie kein Trinkgeld zu zahlen.



Wohngewohnheiten

Wenn Sie eingeladen werden, müssen Sie gleich hinter der Tür Ihre Schuhe ausziehen und sich die Pantoffeln anziehen! In der Toilette ziehen Sie sich andere Pantoffeln („Toilettenpantoffeln“) an!

In einer Wohnung / in einem Haus gibt es kein Bett für Gäste. Ihr Gastgeber legt eine Matratze, und ein Unter- und Ober-Futon auf den (Tatami*)-boden und Sie können auf diese Weise sehr angenehm schlafen.

* eine dicke Binsenmatratze
In Japan ist das Müllsortieren nicht so systematisch. Man soll sortierten Müll (es gibt normalerweise drei Müllsorten: brennbarer, unbrennbarer und Sperrmüll) an bestimmten Wochentagen an Müllsammelstellen in einem Müllbeutel stellen!



Toiletten/Bad

Die Toilette und das Bad sind getrennt.

Es gibt traditionelle japanische Toiletten. Foto Nr. 2 zeigt, wie Sie sie benutzen können.

Offizielle Toiletten sind kostenlos, aber schmutzig.

Sie dürfen sich nicht in der Badewanne waschen, sondern nur daneben (Foto Nr. 3)! Das Wasser benutzt man nämlich gemeinsam, deshalb muss es immer sauber sein.

Im offiziellen Bad (Sento) baden Männer und Frauen getrennt.

Da müssen Sie vorher alles ausziehen!

Sie müssen zuerst im Umkleiraum bei der/dem Angestellten Geld zahlen, die/der auf einem ziemlich hohen Platz zwischen den beiden mit einer hohen Wand getrennten Umkleieräumen sitzt und Aufsicht über alle Gäste führt. Sie/er sitzt da, weil es ihre/seine Arbeit ist, nicht weil es ihr/sein Hobby ist.

Nr. 2



Nr. 3

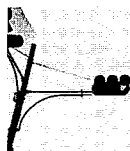


Schulen

In den Grund- und Mittelschulen gibt es Mittagessen. Alle Schüler und Lehrer an einer ganzen Schule essen dasselbe Menü.

Die Studiengebühren sind sehr teuer. Sie betragen bei sozial- und geisteswissenschaftlichen Fakultäten an staatlichen Unis ca. 460000 Yen und an privaten Unis ca. 760000 Yen pro Jahr. (eine DM = 74 Yen).

Schulregeln an Mittel- und Oberschulen sind sehr streng. Besonders streng sind die für Kleidung und Haarschnitt. Z.B. Ohringe und Haarfärbung sind streng verboten.



Nr. 1



Verkehrsmittel

Man fährt auf der linken Seite der Strasse.

Die grüne Farbe schwingt länger als in den deutschsprachigen Ländern, deshalb können Sie ruhig und langsam die Strasse überqueren! Nur diese Farbe blinkt vor dem Wechsel auf Rot.

Auf der Strasse können Sie ein Taxi nehmen! Sie brauchen keinen Taxi stand zu suchen.

Die Hintertüren vom Taxi schliessen und öffnen sich automatisch. Wenn sie sich öffnen, können Sie auf den Rücksitz Platz! Der Gast nimmt also normalerweise zuerst auf den Rücksitz Platz.

Wenn ein Taxi frei ist, können Sie es an dem Schild neben dem Fahrer erkennen. (Siehe Foto Nr. 1)

Fahrkarten werden entwertet, bevor man auf den Bahnsteig gehen kann. Auf der Autobahn müssen Sie Gebühren bezahlen.

Auf der Autobahn gibt es eine Geschwindigkeitsbeschränkung von 80 km/h bis 100 km/h.

楽しく、アクティブに、そしてインテンシブに！

4. ランデスクンデ (Landeskunde) は一般的には「(国・地方などの) 地域研究」を意味するが、「外国語としてのドイツ語」の研究分野では、ドイツ語の背景を成すドイツ語圏の社会システム・生活習慣・文化的伝統全般についての知識を意味し、言語能力と習得と不可分のものとして捉えられる。